

【研究ノート】

欧州におけるポピュリズムの新類型？ ——ベルギーの地域主義政党「新フラームス同盟」

[Research Note]

New Typology of Populism in Europe? : Belgian Regionalist Party
“Nieuw-Vlaamse Alliantie” (New Flemish Alliance)

宮内 悠輔

MIYAUCHI YUUSUKE

第1章 研究の背景

第1節 問題意識

第2節 戦後ヨーロッパにおける政党配置の変化

第3節 地域アイデンティティの高揚

第2章 問題の所在——事例：ベルギーのエスノ地域主義政党

第1節 歴史的経緯

第2節 「新フラームス同盟」の台頭

第3章 先行研究

第4章 研究の展望

第1章 研究の背景

第1節 問題意識

ヨーロッパにおける主権国家の成立は、三十年戦争（1618-1648）と、その後のウェストファリア条約に由来する。すなわち、各国が国家主権の相互承認を行い、さらに国際政治の無政府状態を認めることで、上位権力に従属しない主権国家が成立し、国家の上層にある宗教的権威、世界政府、帝国の構築を事実上排除したのである¹⁾。加えて1789年のフランス革命とその後のナポレオン

1) 藤原婦一、(2007)『国際政治』、放送大学教育振興会、17頁。

戦争は、「人々に自由や平等の理念に基づく旧体制からの解放を煽る結果」となり、ヨーロッパ各国における国民意識の覚醒を促すとともに、18世紀の終わりから19世紀中葉にかけ、エリート文化と民衆文化が統合した国民文化の創出をもたらす結果となった²⁾。また、アンダーソンの指摘するところによれば、宗教改革以降、出版資本主義の発展にともない、ラテン語に代わり出版物に用いられた俗語、あるいは出版語が、読者をして共同体の胚となる部分を形成せしめたという³⁾。

19世紀以降のヨーロッパにおける産業革命と、それに伴う資本主義の発展は、国民意識の発展をさらに促進するものであった。ゲルナーによれば、閉鎖的な共同体である農耕社会から、流動的な分業と見知らぬ他人とのコミュニケーションが要求される産業社会への移行により、国家による統一的な教育が要請され、人々をして同一的なアイデンティティを形成せしめたという⁴⁾。また、ホブズボームは、19世紀から第1次世界大戦にかけての欧州における民主化の時期は、大衆のナショナリスティックな、あるいは排外主義的な感情と、擬似科学的な民族的優越性の感情がそれまで以上に動員されやすくなった時期であるとしている⁵⁾。そして、そのような感情がもっとも刺激された出来事が国際紛争であったという⁶⁾。

以上のように、17世紀以降のヨーロッパ政治史は、国家という単位に基づいて自己意識を規定するナショナリズムの発展の歴史という側面を持つ。

しかし、第1次世界大戦後のヨーロッパにおいては、必ずしも既存の国民国家体制にとらわれない自己意識が政治的イシューとして急速に浮上した。ホブズボームによると、1914年以前の主だった民族運動は、国民国家そのものを対象とするようになり、統一をめざす運動というよりは分離主義的運動と呼

2) 渡邊啓貴(編)、(2008)『ヨーロッパ国際関係史——繁栄と凋落、そして再生』新版、有斐閣、28-33頁。鈎括弧内は引用。

3) B・アンダーソン、(白石隆・白石さや訳)『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』、書籍工房早山、76-87頁。

4) E・ゲルナー、(加藤節監訳)(2000)『民族とナショナリズム』、岩波書店、55-65、187-189頁。

5) E・J・ホブズボーム、(浜林正夫・嶋田耕也・庄司信訳)(2001)『ナショナリズムの歴史と現在』、大月書店、117頁。

6) 同書117頁。

ぶべきものになっていったという⁷⁾。すなわち、それまで国家の下位レベルにあたるとされてきた地域への帰属意識、一言で言い換えるなら「地域アイデンティティ」の高揚が顕著に観察されるようになった。その要求は多岐にわたり、分権化・連邦化から独立まで、また文化的な側面から社会経済的な点まで様々である。後述する通り、戦間期までの地域主義 (regionalism) は、国家への包含、もしくは国家による抑圧によって抑え込まれていた。だが、第 2 次世界大戦終結後、地域主義はその利益を代表する地域主義政党 (regionalist party) の台頭という形をとって高揚することとなる。

本稿ではこの地域アイデンティティの高まりに着目する。実例をいくつか挙げると、まずイギリスでは、1970 年代以降、イギリス・スコットランドにおける地域アイデンティティが高揚している⁸⁾。2014 年にはスコットランド独立を問う住民投票が実施され、最終結果は反対多数となったものの、一時は過半数が賛成票を投じるとの予測も出た⁹⁾。また、イタリアでは、1992 年選挙でキリスト教民主党が歴史的敗北を喫した一方で、急進右翼 (後述) かつ地域政党の「北部同盟」が全体の 8.6% を得票した¹⁰⁾。さらに、ベルギーでは、戦後、南北地域対立が激化し、60 年代後半から 70 年代にかけ、主要三大政党が南北地域ごとに分裂し、ほぼ全ての政党が地域主義政党となった。2010 年選挙では急進地域主義政党「新フラムス同盟」が第一党となり¹¹⁾、その際は政権入りしなかったものの、2014 年選挙では再び第一党となった同党を中心に政権が形成された¹²⁾。

本稿では特に、ベルギーにおいて地域主義政党「新フラムス同盟」(Nieuw-Vlaamse Alliantie: N-VA) が全国選挙で第一党にまで上り詰めたこと

7) 同書 180 頁。

8) 一條都子。(1993)「西ヨーロッパにおけるマイノリティ・ナショナリズムの高揚——1970 年代のスコットランド・ナショナリズムの事例を中心に」、『社会学評論』第 44 巻 1 号, 5 頁。

9) 山崎幹根。(2014)「『独立運動』の視点から考える地域民主主義の刷新——スコットランドからの示唆」、『生活経済政策』第 215 号, 19 頁。

10) Woods, D. (1995) “The Crisis of Center-Periphery Integration in Italy and the Rise of Regional Populism: The Lombard League”, *Comparative Politics*, 27 (2), p.187.

11) 松尾秀哉。(2015)『連邦国家ベルギー——繰り返される分裂危機』, 吉田書店, 131 頁。

12) 同書 167-169 頁。

に注目し、その歴史的な経緯とこれまでの研究成果について整理する。まず、第1章の残りの節で、ヨーロッパにおける政党配置の状況を時系列に沿って確認する。その中で地域主義政党がどのような位置づけであるかを明確にする。次に、第2章では、具体的な事例としてのベルギーの政党配置を整理する。特に、ベルギー政党史におけるN-VAの台頭経緯と、同党の特徴について、より詳細に検討する。第3章では、N-VAに関する既存の研究について確認する。先行研究ではN-VAの台頭を完全に説明できないことを確認した上で、第4章で本稿における見解を提示する。

第2節 戦後ヨーロッパにおける政党配置の変化

本節では、社会的亀裂による戦後ヨーロッパの政党配置についての説明が、ニュー・ポリティクス政党や急進右翼政党の出現によって有効性を失ったことを確認する。

リブセットとロッキンによれば、西ヨーロッパにおいては、20世紀初頭までに社会的な亀裂 (social cleavage) が政治社会を形成し、それが政党の配置へと反映されてきた¹³⁾。有権者にとっては、1960年代以降の政治において「主要政党という形で選択肢が凍結」されたということになる¹⁴⁾。具体的には、(1) 支配的文化と従属的文化 (中心と周辺)、(2) 教会と政府、(3) 都市と農村、(4) 労働者と雇用者、の亀裂がある¹⁵⁾。どのような亀裂が政治社会に影響するかは一樣に同じというわけではなく、国によって異なる。例えばベルギーについては、津田由美子によれば言語 (中心対周辺)、宗教 (教会対政府)、階級 (雇用者対労働者) の3つの亀裂が政治社会を決定してきたとされる¹⁶⁾。

13) Lipset, S.M., and Rokkan, S. (1967) "Cleavage Structures, Party Systems, and Voter Alignments: An Introduction", in Lipset, S.M., and Rokkan, S. eds. *Party Systems and Voter Alignments: Cross-National Perspectives*, New York: The Free Press, p.50. (白鳥浩・加藤秀治郎訳, (2012) 「クリヴィジ構造, 政党制, 有権者の連携関係」, 加藤秀治郎・岩淵美克 (編), 『政治社会学』第4版, 一藝社, 257-258 頁)

14) Ibid., p.50. (同書 257-258 頁)

15) Ibid., pp.23-24. (同書 207-208 頁)

16) 津田由美子, (1991) 「ベルギーにおけるエスニシティ紛争の展開——1970年代を中心に」, 大童一男・山口定・馬場康雄・高橋進 (編), 『戦後デモクラシーの変容』, 岩波書店, 119 頁。

しかし、戦後ヨーロッパ政治においては、社会的亀裂では説明できない新たな政党が出現する。この点を説明するにあたり、イングルハートが提唱した「静かなる革命」(silent revolution)という現象を確認する必要がある。これは、戦後の欧米諸国で、「物質上の福祉と身体の安全に対する要望から、徐々に生活の質を重視する方向に移」っていった現象のことである¹⁷⁾。脱物質主義的価値観の台頭により、凍結仮説の有効性は従前と比べると低下した。そして、「政治の主要な争点が、所得の再配分など伝統的な階級対立にかかわるものから、消費者・環境保護、フェミニズム、市民権の擁護などへと転換し、それらを掲げるエリート挑戦的な運動を引き起こした¹⁸⁾。脱工業社会における新たな矛盾に既成政党が対応できないでいる中、脱物質主義政党が出現し、1980年代に本格的に環境・左翼リパタリアン政党（いわゆる「ニュー・ポリティクス」）が台頭した¹⁹⁾。

脱物質主義政党の台頭に続き、1980年代に一般に「急進右翼政党」²⁰⁾と呼ばれる新たなタイプの政党が出現し、支持を集め始めた²¹⁾。イニャーツィは、早い段階で急進右翼政党の台頭を指摘し、この現象を「静かなる反革命」(silent counter-revolution)と名付けた。イニャーツィによると、既成政党に対する急進右翼政党の特徴は以下の通りである：

- i) 近代性 (modernity) の拒絶
- ii) 分断への嫌悪と調和の模索

-
- 17) Inglehart, R. (1977) *The Silent Revolution: Changing Values and Political Styles among Western Publics*, Princeton: Princeton University Press, p.3. (三宅一郎・金丸輝男・宮沢克訳。(1978)『静かなる革命』, 東洋経済新報社, 3頁) 鉤括弧内は引用。
- 18) 平島健司・飯田芳弘。(2010)『ヨーロッパ政治史』改定新版, 放送大学教育振興会, 215頁, 鉤括弧内は引用。
- 19) 石田徹。(2013)「新しい右翼の台頭とポピュリズム」, 高橋進・石田徹(編), 『ポピュリズム時代のデモクラシー——ヨーロッパからの考察』, 法律文化社, 50頁。
- 20) 「極右」(extreme right)という呼称もよく使われるが, 本稿では特に必要がなければ「急進右翼」(radical right)で統一する。本稿においては, 2つの言葉の間で特に意味の相違はないものとする。
- 21) Ignazi, P. (1992) "The Silent Counter-Revolution: Hypotheses on the Emergence of Extreme Right-Wing Parties in Europe", *European Journal of Political Research*, 22 (1), p.6.

- iii) 自然的共同体の賛美と外国人への敵意
- iv) ヒエラルキー構造への忠誠
- v) 議会における討論への不信²²⁾

急進右翼の台頭は、後述する地域主義とも関連する。なぜなら、地域アイデンティティへの訴求と排外主義を同時に主張する政党が出現したからである。たとえばイタリアの地域主義・急進右翼政党である北部同盟（Lega Nord: LN）は、イタリア南部から北部への文化的・政治的影響を拒絶する言説を繰り返したが、それと全く同じ論理で第三世界からの移民も拒否している²³⁾。また、ベルギーの急進右翼政党「フラームス・ブロック」（Vlaams Blok: VB）は、ベルギー北部フランドレン地域は単一民族・国家であるべきとの立場から、フランドレンの独立と移民の排斥を同時に主張した²⁴⁾。

なお、急進右翼政党は、台頭以来常に同じ政策位置を占めているわけではなく、その政策はやや変容している。古賀光生が指摘するところによると、急進右翼政党は1990年代半ば以降に新自由主義的な姿勢を改めて福祉排外主義の争点を導入することで支持層を拡大したという²⁵⁾。

以上から、リプセットとロッキンが主張してきた凍結仮説は、ニュー・ポリティクス政党や急進右翼政党の登場によって従前ほどの有効性を失ったことが分かった。

第3節 地域アイデンティティの高揚

第2節で、戦後ヨーロッパにおける大まかな政党配置を説明してきた。しかし、戦後ヨーロッパでは、これまで説明してきた政党配置によっては必ずしも説明しきれない「地域主義政党」が出現した。以下では、戦前から現在に至る

22) Ibid., p.12.

23) Woods. (1995) op.cit., p.198.

24) 津田由美子, (2004)「フラームス・ブロックとベルギー政党政治——1990年代を中心に」, 『姫路法学』第39・40合併号, 50頁.

25) 古賀光生, (2014)「新自由主義から福祉排外主義へ——西欧の右翼ポピュリスト政党における政策転換」, 『選挙研究』第30号1巻, 152-153頁.

までの地域主義（政党）の変遷を概略する。

本稿では、「地域主義」(regionalism)という言葉をも、狭義には「サブ国家レベルのアイデンティティ」の意味で用いる²⁶⁾。民族・文化的な意味だけでなく、経済的な意味合いも含むより正確な定義としては、本稿ではスウェーデンによる以下の定義を踏襲する：「地域主義とは、既存の主権国家内で、あるいはその国を超えて、領域をもつサブユニットが自身の影響力を拡大させるプロセスを指し、このプロセスは社会経済的、政治的あるいは文化的な推進力をもつか、またはそれらの力の集合体をもっている」²⁷⁾。

先述の通り、社会的亀裂の中にはエリートと周辺文化の間の紛争も存在するが、その中には地域対立も含まれている²⁸⁾。ただし、ベルギーにおいては地域的な対抗文化が出現・結束した一方で、スイスではそうならなかったように、国・地域によって違いがある²⁹⁾。地域的な対抗文化の出現・結束の要因として、リブセットとロッカンは、①明確な地域へ対抗文化が集中していること、②交通・通信、連携、交渉面で国の中心部と結びつきがなく、文化的・経済的影響力をもつ外部の中心地とのつながりもないこと、③政治的中心都市への経済的依存が最小限であること、を挙げている³⁰⁾。

キーティングは、19世紀後半までに形成された地域主義について、以下のように説明する：「支配的文化に対する」領域的対抗の政治化はしばしば保守的・伝統主義的なセクターに根差すものとなっており、領域の概念は「地域の領域や権利に」侵入してくる国家・社会的変化から地域を保護してくれるものとして用いられるようになっていた（カタルーニャ、バスクなど）³¹⁾。他方で、連邦化や自立を訴えるリベラルな地域主義も見られた（スコットランド、ウェール

26) 地域主義は他に「国家連合ないしそれに準ずる政治的・経済的な統合枠組み」の意味（欧州統合など）で用いられることもあるが、特に断りがない限り本稿ではその意味を表さない。

27) W・スウェーデン、(山田徹訳) (2010)『西ヨーロッパにおける連邦主義と地域主義』、公人社、20頁。

28) Lipset and Rokkan. (1967) op.cit., pp.41-42. (白鳥・加藤訳 (2012), 前掲論文, 245頁)

29) Ibid., pp.41-42. (同論文 245頁)

30) Ibid., p.42. (同論文 245頁)

31) Keating, M. (1998) *The New Regionalism in Western Europe: Territorial Restructuring and Political Change*, Cheltenham: Edward Elgar, p.28-31.

ズなど)³²⁾。そのどちらも、近代国家建設に由来する中心－周辺関係の社会的亀裂によって生じた領域的なアイデンティティ (territorial identity) に基づくものであり³³⁾、それにはエスニックな要素も含まれている³⁴⁾。

以上のような地域主義は、1920年代までに、不満を持つ地域住民の国家代表システムへの取り込みか、スペインのように政府の手で公然と抑圧されることで、国家に包含されていった³⁵⁾。戦後に至っても、1940年代から50年代にかけては、地域における投票行動の「国民化」が進行した³⁶⁾。50年代後半以降は地域主義が問題になることもあったが、概ね中央政府による干渉を受け、管理された³⁷⁾。

しかし、1970年代初頭までに、国家による従来の地域発展政策に対する地域からの批判が生じてきた³⁸⁾。これにより、ヨーロッパにおいて本格的に地域主義が台頭し始める。坂井一成によると、戦後ヨーロッパで台頭した地域主義のほとんどは、地域主義の中でも「エスノ地域主義」(ethno-regionalism) と呼ばれるものである³⁹⁾。エスノ地域主義は多様な定義がなされている。たとえば、ミュラー＝ロンメルは以下のように定義している：「文化的なアイデンティティの承認を要求することによって、現在機能している秩序や、時には国民国家の民主的な秩序にさえも挑戦する、地理的に集中した周縁のマイノリティの活動」⁴⁰⁾。第一章で引用したスウェーデンの定義と比べると、特に文化的側面に力点が置かれていることが分かる。これ以上に明確に戦前までの地域主

32) *Ibid.*, pp.29-31.

33) *Ibid.*, pp.22-23, 27.

34) 高橋進、(2016)「エスノ・リージョナリズムの隆盛と「再国民化」——「国家」・「国民」の分解か「礫岩国家」化か」、高橋進・石田徹(編)、『「再国民化」に揺らぐヨーロッパ——新たなナショナリズムの隆盛と移民排斥のゆくえ』、法律文化社、25頁。

35) Keating. (1998) *op.cit.*, p.34.

36) *Ibid.*, p.43.

37) *Ibid.*, p.47.

38) *Ibid.*, p.52.

39) 坂井一成、(1999)「欧州統合過程における「地域」の位相——領域性とエスニシティの交錯」、『国際政治』第122号、162頁。

40) Müller-Rommel, F. (1998) "Ethnoregionalist Parties in Western Europe: Theoretical Considerations and Framework of Analysis", in De Winter, Lieven, and Türsan, Huri, eds. *Regionalist Parties in Western Europe*, London, New York: Routledge, p.19.

義との違いを示すには、まず戦後ヨーロッパにおけるエスニック・アイデンティティの現れを理解する必要がある。これを高橋進は以下のように説明する：

1970 年代のヨーロッパにおけるエスニック・マイノリティの再発見により、ヨーロッパは国民国家の集まりではなく、各国自身がマルチ・エスニックであり、マルチ・エスニック構造へ進化しているという考えが強まった。エスニック・アイデンティティの覚醒を伴う「エスニック」「テリトリー」というクリーヴィッジの再活性化が生じたのである。⁴¹⁾

つまり、支配的文化と従属的文化の対立や領域性の強調といった問題にエスニックな要素も含まれていたのが戦前の地域主義であるなら、中心対周辺の社会的亀裂が再活性化するにあたってエスニックな主張が前面に出てきたのがエスノ地域主義である。

さらに、1960-70 年代に地域主義的な主張を行う政党が台頭し始めた⁴²⁾。このような「エスノ地域主義政党」(ethno-regionalist party)について、トゥルサンは「既存の国家における、民族意識と領域的要求に核心をおいたナショナリズムを支持する」としている⁴³⁾。トゥルサンは、エスノ地域主義政党のもっとも顕著な特徴は、国家の権力構造を政治的に再編成すること、もしくはある種の「自治」(self-government)、いずれかの要求であるとする⁴⁴⁾。

加えて、1990 年代から現在に至るまでも、エスノ地域主義政党は地方政府への参加・掌握、中央政府への参加、分権化・連邦制化改革などの成果を上げている⁴⁵⁾。同時期に生じた「集団的アイデンティティのムード」(collective identity mood)は、ナショナルな政治的機会構造の枠組みにおいて、エスノ

41) 高橋。(2016)、前掲論文、26 頁。

42) 同論文 25 頁。

43) Türsan, H. (1998) "Introduction: Ethnoregionalist Parties as Ethnic Entrepreneurs", in De Winter, L. and Türsan, H. eds. *Regionalist Parties in Western Europe*, London, New York: Routledge, p.5.

44) Ibid., p.6.

45) 高橋。(2016)、前掲論文、26 頁。

地域主義政党をしてその組織力を動員させるものであった⁴⁶⁾。

高橋によれば、エスノ地域主義政党が強調するエスニックな論点は、既存のイデオロギー軸を横断するものである。換言すれば、「自由主義や社会主義等の伝統的なイデオロギーは二次的な重要性しか持たず、文化的な性格の地域的な要求にほかの主張を従属させている」⁴⁷⁾。さらに、21世紀のエスノ地域主義政党は与党体制への「挑戦者」として党を変革しようと試みたが、その際に2つの方向性が生じたという：①新社会運動の目標や戦略に接近し、エスニックな要求を第一とするのではなく、それを公平・平等・参加などのより広いテーマと結合する普遍主義的・左翼的立場、②エスニックなテーマとポピュリスティックで外国人排除のテーマを融合した、排外主義・急進右翼の立場⁴⁸⁾。このうち、前者の政党は以下の全国的なテーマに接近した：①非エスニック集団へのアピール、②より弱いアイデンティティ資源（地域自治など）、③与党から離れた抗議票、④エスニックでないテーマ（環境保護、特定階級・集団の擁護など）、⑤政治システム全体や諸制度に対する強い反対と抗議⁴⁹⁾。

以上を踏まえ、近年、ヨーロッパでもっとも顕著にエスノ地域主義政党の躍進が見られたベルギーを事例として、かかる点を追求する。

第2章 問題の所在——事例：ベルギーのエスノ地域主義政党

まず、ベルギーの歴史を概略し、戦後における政党配置の変容を確認する。そのうえで、ベルギーにおけるエスノ地域主義政党の台頭を確認する。

第1節 歴史的経緯

ベルギー王国は、北部フランデレン地域（オランダ語圏）と、南部ワロニ

46) Müller-Rommel. (1998) op.cit., p.24. 鈎括弧内の訳は高橋. (2016). 前掲論文より。

47) 高橋. (2016). 前掲論文, 27-28 頁。

48) 同論文 35 頁

49) 同論文 35-36 頁。

一地域（フランス語圏）から成る立憲君主制国家である。1830年にオランダから独立した。ワロニー東部にごく小さなドイツ語圏がある。また、フランデレンの中に飛び地のように首都ブリュッセルがあるが、この都市は両言語圏とされている。

(1) 戦前期の政党配置

オランダからの独立に結実した自由主義者とカトリック教会の同盟は、1840年の学校教育問題を争点に崩壊した⁵⁰⁾。まず、1846年に自由主義ブルジョワジーによって自由党が結成され⁵¹⁾、1884年にカトリック政党が誕生した⁵²⁾。さらに1885年には社会主義を標榜する労働者党が設立された⁵³⁾。

1893年に行われた選挙法改正は、不平等ながらも選挙権を拡大した⁵⁴⁾。また、1899年には世界でもっとも早い段階で比例代表制選挙を導入した⁵⁵⁾。男子普通選挙は1919年に実現した⁵⁶⁾。比例代表制と男子普選の導入により、カトリック政党は単独で過半数の議席を獲得することができなくなった⁵⁷⁾。それゆえ、以降は三大政党による連立政権の形成が行われるようになっていった。

(2) 戦後ベルギーの政党配置

戦後ベルギーにおける政党制の特徴の1つとして、政党が地域ごとに分極化しているということが挙げられる。カトリック政党は1968年に南北地域ごとに政党が分裂し、現在、オランダ語系は「キリスト教民主フラームス」

50) 津田由美子。(2010)「ベルギー」,馬場康雄・平島健司(編)『ヨーロッパ政治ハンドブック』第2版,東京大学出版会,180頁。

51) Delwit, P. (2011) "Partis et Systèmes de Partis en Belgique en Perspective", in Delwit, P, Pilet, J-B, and van Haute, E. eds. *Les Partis Politique en Belgique* (3e Édition), Bruxelles: Édition de l'Université de Bruxelles, p.7.

52) Deschouwer, K. (2012) *The Politics of Belgium: Governing a Divided Society* (2nd Edition), Basingstoke: Palgrave Macmillan, p.80.

53) Delwit. (2011) *op.cit.*, p.8.

54) Witte, E. Craeybeckx, J. and Meinen, A. (2009) *Political History of Belgium: from 1830 onwards*, Brussels: ASP, p.114.

55) Deschouwer. (2012) *op.cit.*, p.113.

56) 津田。(2010), 前掲論文, 181頁。

57) Witte, Craeybeckx, and Meinen. (2009) *op.cit.*, p.143.

(Christen-Democratisch en Vlaams: CD&V), フランス語系は「人道民主中道⁵⁸⁾」(Centre Démocrate Humaniste: CDH)の党名で活動している。労働者党は、既成政党の中ではもっとも長く全国政党であり続けたが、1978年に地域ごとに分裂した。現在、オランダ語系は「新社会革新党⁵⁹⁾」(Socialisten en Progressieven Anders: SP.A), フランス語系は「社会党」(Parti Socialiste: PS)の党名で活動している。自由党については、1972年にオランダ語系が独立した政党PVVを創設した⁶⁰⁾ことで分裂が決定的になり、現在、オランダ語系は「フランデレン自由民主党」(Vlaamse Liberalen en Democraten: VLD⁶¹⁾), フランス語系は「改革者運動」(Mouvement Réformateur: MR)の党名で活動している。一般に、カトリック政党はオランダ語圏フランデレンにおいて、社会主義政党はフランス語圏ワロニーで、自由主義政党は首都ブリュッセルで優位に立つことが多い⁶²⁾。

他のヨーロッパ諸国の例に漏れず、ベルギーでも戦後新たに出現した政党類型の台頭が見られた。エスノ地域主義政党としては、まず1954年にフランデレンで「キリスト教フラームス人民連合」(Christelijke Vlaamse Volksunie)が創設された⁶³⁾。同党は60年代に「人民連合」(Volksunie: VU)へ党名を変更している⁶⁴⁾。もともとは穏健なエスノ地域主義政党で、創設当初から連邦主義を掲げていた⁶⁵⁾。フランデレンにおいて一定の支持を得、1971年から1977年までの3回の選挙では、フランデレンの自由主義政党を上回る得票を記録した⁶⁶⁾。1977年か

58) 和訳は津田。(2010), 前掲論文, 191頁, から。

59) 和訳は津田。(2010), 前掲論文, 191頁, から。

60) Delwit. (2011) op.cit., p.19.

61) なお、選挙時は自由主義諸政党と"Open VLD"の名称で合同リストを形成している。津田。(2010), 前掲論文, 191頁。

62) 津田。(2010), 前掲論文, 185頁。

63) De Winter, L. (1998) "The Volksunie and the Dilemma between Policy Success and Electoral Survival in Flanders", in De Winter, L. and Türsan, H. eds. *Regionalist Parties in Western Europe*, London, New York: Routledge, pp.30.

64) Ibid., p.30.

65) 三竹直哉。(1998)「連邦制下の民族対立——ベルギーの言語集団間対立」, 宮島喬(編), 『現代ヨーロッパ社会論——統合のなかの変容と葛藤』, 人文書院, 120-123頁。

66) De Winter. (1998) op.cit., pp.30, 33.

ら 78 年にかけては政権入りも果たしている⁶⁷⁾。

一方ワロニーでも、1965 年にカリスマ的指導者フランソワ・ペランによって「ワロン党」(Parti Wallon) を中心とした政党連合「ワロニー集会」(Rassemblement Wallon: RW) が創設された⁶⁸⁾。同連合は、ワロニーが(主に経済的に)高度に自立すべきであると主張した。1971 年選挙でワロニー全体の 20.9% の票を獲得するまでに至ったが、その後は内部分裂や他党との競合で凋落していった。

ブリュッセルでは、1964 年にフランコフォン民主戦線 (Front Démocratique des Francophones: FDF) が創設された⁶⁹⁾。同党は、ブリュッセルのフランコフォン(フランス語話者)市民の利益を守ることを目的としている。1965 年に全国議会で 3 議席を得て以来、70 年代を通してブリュッセルの住民の 3 分の 1 以上から票を得るほどの成長を見せた。1980 年代は支持を得られず苦しんだものの、1993 年にフランス語系自由主義政党との選挙同盟を結成したこともあり、1995 年に再び支持を回復している。

1980 年代には環境政党が台頭する。南北地域に別個に存在するが、全国政党が分裂したわけではなく、それぞれ異なったルーツを持つ別の政党である。オランダ語系環境政党の「アガレフ」(Agarev) は、1970 年、アントウェルペンのカトリック司祭によって創始された新社会運動に起源を持つ⁷⁰⁾。1981 年末、政党が組織されていない状態で 3 人の議員が当選する躍進を見せ、翌 1982 年に正式に政党として発足した⁷¹⁾。現在は党名を「緑!」(Groen!) に改名している⁷²⁾。一方、フランス語系環境政党の「エコロ」(Ecolo) は、左翼リバタリアンのポ

67) Deschouwer. (2012) *op.cit.*, p.91.

68) Buelens, J. and van Dyck, R. (1998) "Regionalist Parties in French-Speaking Belgium: The Rassemblement Wallon and the Front Démocratique des Francophones", in De Winter, L. and Türsan, H. eds. *Regionalist Parties in Western Europe*, London, New York: Routledge, pp.51-53.

69) Ibid., pp.56-58.

70) Buelens, J. and Delwit, P. (2008) "Belgium: Ecolo and Agalev (Groen!) : Two Institutionalized Green Parties with Parallel but Different Stories", in Frankland, E. G, Lucardie, P. and Rihoux, B. eds. *Green Parties in Transition: The End of Grass-roots Democracy?*, Farnham, England; Burlington, Vt.: Ashgate, p.82.

71) Ibid., p.83.

72) Ibid., p.88.

ール・ラノワイエによるイニシアティヴから発足した⁷³⁾。1981年選挙で2人の下院議員と3人の上院議員を当選させた⁷⁴⁾。

1980年代以降は、オランダ語系の既成政党がエスノ地域主義的な主張をするようになったことで、VUは選挙での得票数を減らしていった⁷⁵⁾。1985年には10万以上もの票を失ったという⁷⁶⁾。日野愛郎は、環境政党の台頭もVUにとっては衰退要因であったとの見解を示している⁷⁷⁾。

さらに、1991年選挙での急進右翼政党フラムス・ブロック (Vlaams Blok: VB)⁷⁸⁾の台頭以降、VUはただでさえ減少し続けていた票を従前以上に失った⁷⁹⁾。VBは、VUからの離脱者によって1978年に結党された急進右翼政党である⁸⁰⁾。1983年頃まではフランデレン民族主義に重心を置いていたが、同時期から徐々に排外主義に力点を置き直した⁸¹⁾。結党直後は振るわなかったものの、少しずつ支持を伸ばし、1991年の全国選挙でフランデレンの有権者からおおよそ10%の票を得る⁸²⁾。この選挙日は「黒い日曜日」と呼ばれている⁸³⁾。VBの主張は、おおむね以下の3つを組み合わせたものである：①反移民、②法と秩序、③分離主義 (フランデレン独立)⁸⁴⁾。上記以外の論点に関しては中道

73) Ibid., p.76.

74) Ibid., p.77.

75) Deschouwer. (2012) op.cit., p.91.

76) van Haute, E. (2011) "Volksunie, Nieuw-Vlaamse Alliantie, Spirit, Vlaams-Progressief", in Delwit, P. Pilet, J-B, and Van Haute, E. eds. *Les Partis Politique en Belgique* (3^e Edition), Bruxelles: Édition de l'Université de Bruxelles, p.203.

77) 日野愛郎, (2001)「ベルギーにおける政党システム編成——欧州世論調査 (Euro-Barometer) の分析を中心に」, 『早稲田政治公法研究』第66号, 267頁。

78) 後述の「フラムス・ベラング」と特に区別せず、いずれもVBと略すこととする。

79) 1995年選挙の段階で、VUは政党独自の争点を完全に喪失していたことが、スウィンヘダウらの研究で明らかにされている。Swyngedouw, M. Beerten, R. and Billiet, J. (1997) "Les Motivations Electorales en Flandre 21 Mai 1995", *CRISP Courrier Hebdomadaire*, 1557, p.27.

80) 上西秀明, (1998)「ベルギーのオランダ語地域に見る民族地域主義の歴史の変遷と極右現象」, 山口定・高橋進 (編), 『ヨーロッパ新右翼』, 朝日新聞社, 291-292頁。

81) この原因について、上西秀明は党内人事の若返りを指摘している。上西, (1998), 前景論文, 294頁。

82) Deschouwer. (2012) op.cit., p.95.

83) Ibid., p.95.

84) Ibid., p.95.

寄りの立場をとる傾向にある⁸⁵⁾。VB の台頭を受け、1990 年代以降の VU は従来の主張よりさらにラディカルに国家からフランデレンへの権限委譲を要求するようになる⁸⁶⁾。

2001 年、党の今後の方針を決定する VU の党内レファレンダムにおいて右派グループが勝利⁸⁷⁾。分裂した右派が党名を「新フラムス同盟」(Nieuw-Vlaamse Alliantie: N-VA) に改める。(N-VA については後述)

VB は 2007 年選挙までは比較的高い支持を集めたが、2010 年選挙でやや議席数を落とした⁸⁸⁾。なお、2004 年にヘント上級裁判所が、政党の主張が人種差別を禁じた法律に反すると判決を下したことを受け、党名をフラムス・ベラング (Vlaams Belang: VB) に変更した⁸⁹⁾。

フラムス・ブロック／ベラングに対しては、「防疫線」(cordon sanitaire) と呼ばれる協定により、ほかの全ての政党が一切の協力を拒否している⁹⁰⁾。

第 2 節 「新フラムス同盟」の台頭

先述の通り、2001 年に VU の分裂から誕生した N-VA であるが、結党当初から順風満帆であったわけではない。というのも、2003 年の連邦選挙においては、N-VA はわずか 1 議席しか獲得できず惨敗したからである。2003 年の連邦選挙から 2008 年までは、オランダ語系キリスト教民主主義政党 CD&V と N-VA が、「フランデレン・カルテル」と呼ばれる共通リストを作成していたが、これは 2008 年に解消されている⁹¹⁾。

2009 年のフランデレン地域圏選挙では、N-VA は 13% の票を集め、地域圏

85) 津田。(2004)。前掲論文、53-54 頁。

86) 三竹。(1998)。前掲論文、120-123 頁。なお、これは VU に限った話ではなく、多かれ少なかれ当時のオランダ語系政党全体に見られた傾向である。

87) Deschouwer。(2012) *op.cit.*, p.91。

88) 津田由美子。(2011)「ベルギー——コンセンサス・デモクラシーの成立と変容」、津田由美子・吉武信彦(編著)、『北欧・南欧・ベネルクス』、ミネルヴァ書房、156 頁。

89) 津田由美子によると、これには、民主主義の理念を強調することによって「普通の政党」への変革をアピールする意味があるという。津田。(2011)。前掲論文、157 頁。

90) 同論文 54 頁。

91) Deschouwer (2012), *op.cit.*, p.92。なお、カルテル解消の理由は、政権入りした場合の更なる国政改革を CD&V が保証しなかったためである。

連合政権入りした。N-VA がじわじわと支持を集め始めていたことが窺える。

さらに 2010 年の連邦選挙において、フランデレンで 28% の票を集め、27 議席を獲得した。これにより連邦議会で N-VA が第一党になった。武居一正曰く「政変」である⁹²⁾。

第一党となった N-VA と、その党首バルト・デウエバー（Bart De Wever）は、連立に向けた積極的な提案をすることもなく、首相職を第二党である PS（フランス語系社会主義政党）党首エリオ・ディ・ルポ（Elio Di Rupo）に譲る⁹³⁾。同党は、フランデレンが要求する制度改革についての合意が先行しない限り、連立交渉には応じない姿勢を表明。1 年超もの間、連立交渉は全く進まなかった。

結局、オランダ語系・フランス語系それぞれのキリスト教民主主義・社会主義・自由主義政党 6 党によって連立交渉が行われた。その結果、選挙から 589 日かけて、ディ・ルポを首班とした政権が発足した。

N-VA という政党の特徴を簡単にまとめると、以下のようになる。まず、同党は段階的にフランデレンの自治を高めることを当面の目標としており、即時のフランデレン独立までは求めている⁹⁴⁾。具体的には、短期的に連合国家としてのベルギー（‘confederal’ Belgium）を成立させようと試みている⁹⁵⁾。また、2010 年選挙後の交渉ではいく度も「改革」（＝分権化）を要求し、その点では決して妥協しなかった⁹⁶⁾。さらに、移民はフランデレン社会の一部であるという立場を取っており、VB とは異なった立場であることを強調している点も注目に値する⁹⁷⁾。加えて、批判対象であるはずのワロニー地域圏からさえも

92) 武居一正。(2012)「ベルギーの政変 *crise politique* (2010 年 - 2011 年) について——その憲法的問題点を中心に」、『福岡大学法学論叢』第 56 巻 4 号、366 頁。

93) 武居。(2012)、前掲論文、374 頁。

94) 松尾。(2015)、前掲書、168 頁。

95) Maly, I. (2013). “Scientific’ Nationalism: N-VA, Banal Nationalism and the Battle for the Flemish Nation”. *Tilburg Papers in Culture Studies*, Paper 63, <https://www.tilburguniversity.edu/research/institutes-and-research-groups/babylon-tpcs/>, Tilburg University, p.5.

96) 松尾。(2015)、前掲書、131-144 頁。

97) グレン・M・E・デュアによる複数の N-VA 議員へのインタビューから。Duerr, G.M.E. (2015) *Secessionism and the European Union: The Future of Flanders, Scotland, and Catalonia*, Lanham, Maryland: Lexington Books, pp.53-55.

支持者を取り込もうとしている、との指摘も存在することは留意すべきである⁹⁸⁾。なお、2009 年地域圏選挙におけるデータを分析した研究では、①男性の支持者が多い、②これまで急進右翼を支持してきた若年層が N-VA への支持に転向している、③高学歴の支持層を有している、という 3 点が指摘されている⁹⁹⁾。水島治郎の評価を引くなら、「ややポピュリスト的な傾向がある点で[VB と] 似て」いながら、急進右翼よりも「現実的な選択肢」であるという¹⁰⁰⁾。

では、既存の研究に照らして、どのようにこの政党を位置付ければよいだろうか。

ここで、極めて特殊な事例であって分析する意味がない、と考えるのは不適切である。というのも、まず N-VA の前身政党である VU は、90 年代には N-VA ほど支持を得られなかった点を見逃してはならない。第 2 に、その N-VA も 2000 年代前半はあまり支持を集められなかった。その意味では 2010 年の N-VA の台頭は「特殊」なのかもしれないが、ならばなぜ「特殊」な現象が起きたのかを明らかにすべきである。そしてなによりも、ヨーロッパにおける地域アイデンティティの高揚は現在進行形の現象であり、政治学的に取り組むべきテーマとなっている。

本事例で注目すべき点は、N-VA と VB がともに急進的な地域主義政党でありながら、一方が躍進し、もう一方は凋落している点である。先述の通り、そもそも N-VA と VB はともに VU を源流とする政党になる。先に創設された VB は、1990 年代に台頭して VU の衰退を加速したが、その VU から生まれた N-VA が今度は VB の弱体化を後目に第一党にまで上り詰めた。すなわち、急進右翼としての色彩が色濃い地域主義政党である VB と、そうではない N-VA にどのような違いがあるのか、また、あるとしたら N-VA とはいかなる政党であるのか、以上 2 点を明確にする必要がある。

98) 松尾。(2015)。前掲書、163 頁。

99) Pauwels, T. (2011) "Explaining the Strange Decline of the Populist Radical Right Vlaams Belang in Belgium: The Impact of Permanent Opposition", *Acta Politica*, 46 (1), p.72.

100) 水島治郎。(2015)「『民衆の代表』か「防疫線」か——ベルギー・フランデレンのポピュリズム政党」、『千葉大学法学論集』第 29 巻 4 号、22-23 頁。鉤括弧内は引用。

次章以降で、かかる疑問を追究していく。

第3章 先行研究

本研究に適用できる研究は、以下の4つである。

(1) エスニック紛争／言語対立

津田由美子は、ベルギーにおいては戦後に政治化が進んだエスニック集団からの圧力によって、中央政府が分権化・連邦化を進めざるをえなかったことを指摘する¹⁰¹⁾。津田はこれに①地域間の経済格差、②EC統合によるベルギー政治の欧州への解消の見込み、を付け加えている¹⁰²⁾。また、三竹直哉は、地域、国家（ベルギー）、欧州に対するフランデレンとワロニーの人々の帰属意識に差があることに注目し、両社会の分極化を指摘した¹⁰³⁾。この観点からは、N-VAの台頭はフランデレンとワロニーそれぞれで、国家と地域についてのアイデンティティに齟齬があるエスニック集団間の対立が激化した、と捉えられる。

いずれもベルギー政治史全体において有効性を持つ研究であるが、本稿の事例に適用することは必ずしも適切ではない、というのも、フランデレンとワロニーの地域対立はなにも2000年代以降に限った話ではなく、戦後、（その強弱に差はあれ）特に1960年代からの一貫した傾向だからである、つまり、N-VAが台頭するほどフランデレンの人々の地域アイデンティティが高まった理由としては広すぎるということになる。

101) 津田由美子、(1993)「ベルギーのエスニック紛争と連邦制——1993年の連邦制への移行に関する一考察」、『年報政治学』第45号、52-54頁。

102) 同論文55-56頁。

103) 三竹直哉、(1995)「連邦制ベルギーの国家とアイデンティティ」、『国際政治』第110号、122頁。

(2) 後継者政党 (successor party)

バイエンスらは、N-VA の登場と成功に着目し、VU/N-VA の有権者へのアンケート調査結果と掲げている政策、そして党組織の変遷について、期間を区切りながら分析した。それを踏まえ、N-VA は VU の後継者であり、それほど新しい政党というわけではないと結論づけている¹⁰⁴⁾。N-VA の新しさは選挙におけるアピールの成長と、党首の人気にあるという¹⁰⁵⁾。

しかし、前身政党がその最盛期にも成し遂げていない第一党の地位獲得にまで至った地域政党が、極めて強い訴求力を持つこと、またその党首に個人的な人気があり、選挙における得票につながっているということは、それ自体が新しい現象だと言える。本稿では N-VA が VU の後継者であるという結論を否定するものではないが、それでも N-VA という政党そのものの新しさを追究するべきであるとの立場をとる。

(3) シヴィック・ナショナリズム (civic nationalism)

デュアは、N-VA 議員・関係者へのインタビューという手法をとり、N-VA の政策を「言語」「文化」「移民」「政治的自立」「経済」の 5 点から分析して N-VA の政党としての特徴の分析を試み、さらにフラームス・ベラング (VB) との比較も行った。デュアによると、VB の主張についてはエスニシティに基づいたナショナリズムであり、また N-VA の主張は市民性に基づいたナショナリズム (シヴィック・ナショナリズム) であると類型化した¹⁰⁶⁾。そして、2004 年のフランデレン独立運動においてはエスニシティに基づいたナショナリスト的綱領の方が支持を集めていたが、2014 年には N-VA の立場のほうがより人気のある選択肢になっていたと主張している¹⁰⁷⁾。デュアの研究は主に

104) Beyens, S. Deschouwer, K. van Haute, E. and Verthé, T. (2013) "The Rise and Success of a (not so new) Party: The N-VA in Flanders", APSA 2013 Annual Meeting Paper; American Political Science Association 2013 Annual Meeting, Chicago, 29th August, Available at SSRN: <http://ssrn.com/abstract=2300960>, pp.20-21.

105) *Ibid.*, p.20.

106) Duerr. (2015) *op.cit.*, pp.73-76.

107) *Ibid.*, p.76.

2014 年連邦選挙に焦点をあてたものだが、① 2010 年選挙でも N-VA が大勝し、VB は凋落した点では共通していること、② デュアが資料として依拠するインタビューには、2010 年選挙前に実施されたものも含まれること、以上 2 点から、2010 年選挙への適用も可能である。

この研究を本稿の問題意識と照応すると、明らかにできない点がある。すなわち、フランデレン独立運動において N-VA の「シヴィック・ナショナリズム」に人気があったとしても、なぜ独立問題が重要なイシューになったかが説明できない。換言すれば、市民的なナショナリズムを掲げることが N-VA の支持につながるメカニズムが明示されていない。

(4) 「科学的」ナショナリズム ('scientific' nationalism)

マリーは、特に N-VA 党首バルト・デウエベールの言説に着目し、N-VA の姿勢と目標を分析している。それによると、デウエベールのプロジェクトの新しさは、ベネディクト・アンダーソンをはじめとする多くの学者の研究を引くことで形成された、N-VA の政策パッケージとコミュニケーション戦略にあるという¹⁰⁸⁾。マリーによれば、デウエベールが科学的な研究 (scientific research) を引用するのは、以下の理由からである：① 安全であり、かつ 19 ～ 20 世紀の「誤ったナショナリズム」とは共通性を持たない 21 世紀の人道主義的・民主的ナショナリズムとして、自身のナショナリズムを売り出していくため、② マスメディアにおけるコミュニケーション戦略の基礎としてのナショナリスティックな動機に対し、公共の支持が成長した、という洞察が増大したため¹⁰⁹⁾。また、デウエベールがフランデレンのナショナリズムに望んでいることは、それが完全に「普通」かつ当然のものと思われ、またあらゆる会話において暗示されるものであるということだという¹¹⁰⁾。マリーはこのようなナショナリズムを「科学的」ナショナリズムと呼ぶ¹¹¹⁾。そして、その科学的なパッケ

108) Maly. (2013) op.cit., pp.7-9.

109) Ibid., p.9.

110) Ibid., p.12.

111) Ibid., p.7.

ージが、知的で安全なイメージを獲得することによって、幅広い聴衆をしてそのナショナリズムを受容可能とせしめているという¹¹²⁾。

この研究は「科学的」なナショナリズムがどのようにして受け入れられたか、そのメカニズムが明らかにされていない。そのため、本稿の問題意識には部分的にしか応答できない。

なお付け加えるならば、特に (3) と (4) に顕著であるが、地域アイデンティティの高揚に対して「ナショナリズム」という言葉が使用されている点にも注意したい。本稿で何度も強調してきた点であるが、戦後における地域アイデンティティの高揚は、戦前までに確立されてきた国民国家やナショナリズムがすでに自明のものとされている政治・社会状況で発生した現象である。そのため、この現象にナショナリズムという言葉を用いると、戦前までに培われてきたナショナリズムとの相違が非常にあいまいになり、また分かりづらくなってしまう。そのため、本稿ではあくまで「地域主義」という言葉を用いることが適切であるとの立場に立つ。

第 4 章 研究の展望

本報告における議論をまとめると、エスニック・アイデンティティを強調しながらも、エスニシティに必ずしも関連しない 이슈に接近することで、既存のイデオロギー軸にとらわれずに政権与党や国家体制を批判するエスノ地域主義政党の台頭、という現象が起きている。そして、そのエスノ地域主義政党がヨーロッパにおいて少なからぬ機会に大きな支持を集めるのである。それゆえ、政党の位置づけと台頭のメカニズムを実証的に分析する必要がある。また、それとは別に急進右翼の立場へと向かったエスノ地域主義政党が存在するという点も併せて検討しなければならない。

112) Ibid., p.15.

ここでは、フランデレンにおける地域アイデンティティの高揚を、欧州における新しいポピュリズム現象であると捉えることにする。というのも、先述の通り、ここでナショナリズムという言葉を使うことには慎重にならなければならないからだ。これまで見てきた通り、N-VA はフランデレン・ナショナリズムの創出ないし強化を強く意識した政策を打ち出している。このような政策方針を強力に掲げる必要があるのは、つまり、フランデレンの人々の間に少なからず既に「ベルギー・ナショナリズム」が存在することの一証左だということである。したがって、ナショナリズム運動として本事例を捕捉すると、(ナショナリズムという言葉の定義の難しさも相まって) どのレベルのナショナリズムの話をしているのかが曖昧になり、正確に事例を把握することができなくなる。また、これに近く、さらに定義が狭い専門用語であるエスノ地域主義と表現するにしても、フラムス・ブロック／ベラング (VB) のような排外的な地域主義運動まで含んでしまうので、やはりその射程範囲が広すぎ、N-VA と他党との相違点が分かりにくくなる。したがって、既存のナショナリズム研究を援用して N-VA を捉えることには、限界があるため、本稿ではポピュリズムの観点から研究を行う。

吉田徹によれば、ポピュリズムとは「個人主義、文化的寛容、『法の支配』や経済的リベラリズムなど」の「尊重されるべき原理原則」が、「一部の社会の支配者のみの特権に留ま」っていることを指摘し、それを可能にしている「権力構造」を打破しようとする運動のことである¹¹³⁾。そして、ポピュリストは「人々の直感的で素朴な感情を重視」し、「人々の感情を刺激するような、単純で直接的な」メッセージを発することが多いという¹¹⁴⁾。

より詳細な定義としては、タガートが以下の6つをポピュリストの性格的特徴として挙げている：①代表政治への敵意、②奉仕対象としての共同体という理想化された概念を代表する、[地政学用語でいうところの]「ハートランド」(heartland) を伴った自己認識をする傾向にある、③核心的価値の欠落、④極

113) 吉田徹。(2011)『ポピュリズムを考える——民主主義への再入門』。NHK 出版。67 頁。鉤括弧内はすべて引用。

114) 同書 68 頁。鉤括弧内は引用。

度の危機という感覚に対する反応, ⑤ [ポピュリスト自身が政治的であるということに対して] 自制的な特質, ⑥ 高度にカメレオンの (chameleonic) である, 換言すれば, 時と場所によっては, ポピュリズムとは何かということに類似性があるかは必ずしも明確ではない¹¹⁵⁾。

また, ムッデは, ポピュリズムを「社会を同質な集団と敵対集団, つまり『純粋な人々』と『腐敗したエリート』に極限まで分裂しているとみなすイデオロギーで, 政治とは人々の『一般意思』 (volonté général) の表現であるべきだと論ずる」ものであると定義した¹¹⁶⁾。そのうえで, 現代の西洋民主主義における政治では, ポピュリスト的な言説はメインストリームになっていると指摘し, このことを「ポピュリスト時代精神」 (populist Zeitgeist) と表現している¹¹⁷⁾。

N-VA の台頭をポピュリズム現象として捉える場合, さらなる学術的な検討が必要となる。というのも, ポピュリズムとはエスノ地域主義以上に広範な定義を含む概念である。またムッデの指摘通り, 現在の西洋民主主義ではポピュリズムは決して特異な現象ではない。そのため, どのようなポピュリズムであるのか, という点についてもう少し精緻化しなければならない。

そこで, 本稿では地域性にに基づいたポピュリズムという概念を提示する。地域主義とポピュリズムとの関係については, 急進右翼に接近した地域主義政党がポピュリストとして扱われてきた。ベルギーでは VB がこれにあたる。これも既に説明したことだが, 急進右翼の立場に向かった地域主義政党は, 他地域と移民の両方を排外主義的なレトリックで拒絶している。ベルギーにおける「腐敗したエリート」とは, これまで地域間対立をコンセンサスで解決してきた既成政党がこれに当てはまる。

一方, N-VA については, 先述の通り移民を拒絶する政策を展開していない。さらに, N-VA は既成政党よりは踏み込んだ地域利益擁護を訴えているが, 批

115) Taggart, P. (2003) "The Populist Turn in the Politics of the New Europe", prepared for presentation at the 8th Biannual International Conference of the European Union Studies Association conference, Nashville, 27-9th March. Available at Archive of European Integration: <http://aei.pitt.edu/id/eprint/2962>, pp. 6-9.

116) Mudde, C. (2004) "The Populist Zeitgeist", *Government and Opposition*, 39 (4) , p.562.

117) Ibid., p.562.

判対象であるはずのワロニーの住民さえも潜在的な有権者として扱っている。このように、支持母体となる地域とその住民に依拠してその利益を擁護しつつも、社会的利益において競合する他のエスニック集団からも支持を獲得しようとする姿勢は、これまでベルギーで見られなかった地域主義政党のあり方である。特定集団への批判を行うことで一定の支持層から支持を受けるに留まらず、批判対象への支持層の拡大も図る点は、新しいポピュリストであると捉えるのが適切である。

改めてまとめると、既存の急進右翼ポピュリストは、支持基盤となる住民の利益を、敵対する集団への攻撃によって擁護しようとする。それに対し、N-VA は活動地域の利益に訴求し、他地域への遠慮のない批判によって支持を獲得するのは同じだが、一方でその敵対するはずの地域や、第三者としての移民からの支持も得ようとしている。前者は自身と「異質」と見なした集団に対して排外的であるのに対し、後者は敵対しながらも、その集団から自集団への引き寄せ・包摂も試みているといえる。同じ地域主義政党であっても、対外融和的な性質を持つか否かでは大きく異なるといえ、その区別を行うことは極めて重要である。

以上から、急進右翼の立場に接近した地域主義政党と N-VA のどこが異なるのか、概念化を試みる。本稿では、両者をいずれも地域性に基づいたポピュリストであると考え、合わせて「ポピュリスト・エスノ地域主義政党」(Populist Ethno-Regionalist Parties: PEnRP) と呼称する。その上で、両党の相違を表すためのさらなる類型化を行う。すなわち、フラムス・ベラングのように地域アイデンティティを排他性・排外主義の観点から政策として利用する政党を「ポピュリスト排外型地域主義政党」(Populist Chauvinistic Regionalist Parties: PCRП) と、また N-VA のように支持母体の地域アイデンティティに訴えかけてその形成・発展を目指し、さらに支持基盤とは異なる地域住民・エスニック集団への有権者拡張も試みる地域主義政党を「ポピュリスト拡大型地域主義政党」(Populist Enlargeable Regionalist Parties: PEnRP) と呼ぶこととする。

ここで提示した類型には、より緻密な定義を構築する余地がある。また、概念を実証する具体的な分析も必要となる。以上の点について、本年度立教大

学に提出予定の修士論文における研究課題とする。

参考文献

- Beyens, S, Deschouwer, K, van Haute, E, and Verthé, T. (2013) “The Rise and Success of a (not so new) Party: The N-VA in Flanders”, APSA 2013 Annual Meeting Paper; American Political Science Association 2013 Annual Meeting, Chicago, 29th August, Available at SSRN: <http://ssrn.com/abstract=2300960>.
- Buelens, J, and Delwit, P. (2008) “Belgium: Ecolo and Agalev (Groen!) : Two Institutionalized Green Parties with Parallel but Different Stories”, in Frankland, E. G, Lucardie, P, and Rihoux, B, eds. *Green Parties in Transition: The End of Grass-roots Democracy?*, Farnham, England; Burlington, Vt.: Ashgate.
- Buelens, J, and van Dyck, R. (1998) “Regionalist Parties in French-Speaking Belgium: The Rassemblement Wallon and the Front Démocratique des Francophones”, in De Winter, L, and Türsan, H, eds. *Regionalist Parties in Western Europe*, London, New York: Routledge.
- Delwit, P. (2011) “Partis et Systèmes de Partis en Belgique en Perspective”, in Delwit, P, Pilet, J-B, and van Haute, E, eds. *Les Partis Politique en Belgique* (3^e Édition) , Bruxelles: Édition de l'Université de Bruxelles.
- Deschouwer, K. (2012) *The Politics of Belgium: Governing a Divided Society* (2nd Edition) , Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- De Winter, L. (1998) “The Volksunie and the Dilemma between Policy Success and Electoral Survival in Flanders”, in De Winter, L, and Türsan, H, eds. *Regionalist Parties in Western Europe*, London, New York: Routledge.
- Duerr, G.M.E. (2015) *Secessionism and the European Union: The Future of Flanders, Scotland, and Catalonia*, Lanham, Maryland: Lexington Books.
- Ignazi, P. (1992) “The Silent Counter-Revolution: Hypotheses on the Emergence of Extreme Right-Wing Parties in Europe”, *European Journal*

of Political Research, 22 (1) .

Inglehart, R. (1977) *The Silent Revolution: Changing Values and Political Styles among Western Publics*, Princeton: Princeton University Press. (三宅 一郎・金丸輝男・宮沢克訳. (1978)『静かなる革命』, 東洋経済新報社)

Keating, M. (1998) *The New Regionalism in Western Europe: Territorial Restructuring and Political Change*, Cheltenham: Edward Elgar.

Lipset, S.M. and Rokkan, S. (1967) "Cleavage Structures, Party Systems, and Voter Alignments: An Introduction", in Lipset, S.M., and Rokkan, S. eds. *Party Systems and Voter Alignments: Cross-National Perspectives*, New York: The Free Press. (白鳥浩・加藤秀治郎訳. (2012)「クリヴィジ構造, 政党制, 有権者の連携関係」, 加藤秀治郎・岩淵美克 (編).『政治社会学』第4版, 一藝社)

Maly, I. (2013) "'Scientific' Nationalism: N-VA, Banal Nationalism and the Battle for the Flemish Nation", *Tilburg Papers in Culture Studies*, Paper 63, <https://www.tilburguniversity.edu/research/institutes-and-research-groups/babylon/tpcs/>, Tilburg University.

Mudde, C. (2004) "The Populist Zeitgeist", *Government and Opposition*, 39 (4) .

Müller-Rommel, F. (1998) "Ethnoregionalist Parties in Western Europe: Theoretical Considerations and Framework of Analysis", in De Winter, L. and Türsan, H. eds. *Regionalist Parties in Western Europe*, London, New York: Routledge.

Pauwels, T. (2011) "Explaining the Strange Decline of the Populist Radical Right Vlaams Belang in Belgium: The Impact of Permanent Opposition", *Acta Politica*, 46 (1) .

Swyngedouw, M. Beerten, R. and Billiet, J. (1997) "Les Motivations Électorales en Flandre 21 Mai 1995", *CRISP Courrier Hebdomadaire*, 1557.

Taggart, P. (2003) "The Populist Turn in the Politics of the New Europe", prepared for presentation at the 8th Biannual International Conference of the European Union Studies Association conference, Nashville, 27-9th

- March, Available at Archive of European Integration: <http://aei.pitt.edu/id/eprint/2962>.
- Türsan, H. (1998) "Introduction: Ethnoregionalist Parties as Ethnic Entrepreneurs", in De Winter, L. and Türsan, H. eds. *Regionalist Parties in Western Europe*, London, New York: Routledge.
- van Haute, E. (2011) "Volksunie, Nieuw-Vlaamse Alliantie, Spirit, Vlaams-Progressief", in Delwit, P, Pilet, J-B, and Van Haute, E, eds. *Les Partis Politique en Belgique* (3^e Édition) , Bruxelles: Édition de l'Université de Bruxelles.
- Witte, E, Craeybeckx, J, and Meinen, A. (2009) *Political History of Belgium: from 1830 onwards*, Brussels: ASP.
- Woods, D. (1995) "The Crisis of Center-Periphery Integration in Italy and the Rise of Regional Populism: The Lombard League", *Comparative Politics*, 27 (2).
- 網谷龍介. (2010) 「オーストリア」, 馬場康雄・平島健司 (編). 『ヨーロッパ政治ハンドブック』第2版, 東京大学出版会.
- B・アンダーソン. (白石隆・白石さや訳) 『定本 想像の共同体——ナショナルイズムの起源と流行』, 書籍工房早山.
- 石田徹. (2013) 「新しい右翼の台頭とポピュリズム」, 高橋進・石田徹 (編). 『ポピュリズム時代のデモクラシー——ヨーロッパからの考察』, 法律文化社.
- 一條都子. (1993) 「西ヨーロッパにおけるマイノリティ・ナショナリズムの高揚——1970年代のスコッティッシュ・ナショナリズムの事例を中心に」, 『社会学評論』第44巻1号.
- 上西秀明. (1998) 「ベルギーのオランダ語地域に見る民族地域主義の歴史的変遷と極右現象」, 山口定・高橋進 (編). 『ヨーロッパ新右翼』, 朝日新聞社.
- E・ゲルナー. (加藤節監訳) (2000) 『民族とナショナリズム』, 岩波書店.
- 古賀光生. (2014) 「新自由主義から福祉排外主義へ——西欧の右翼ポピュリスト政党における政策転換」, 『選挙研究』第30号1巻.
- 坂井一成. (1999) 「欧州統合過程における「地域」の位相——領域性とエスニシティの交錯」, 『国際政治』第122号.

- W・スウェンデン．（山田徹訳）（2010）『西ヨーロッパにおける連邦主義と地域主義』，公人社．
- 高橋進．（2016）「エスノ・リージョナリズムの隆盛と「再国民化」——「国家」・「国民」の分解か「礫岩国家」化か」，高橋進・石田徹（編），『「再国民化」に揺らぐヨーロッパ——新たなナショナリズムの隆盛と移民排斥のゆくえ』，法律文化社．
- 武居一正．（2012）「ベルギーの政変 *crise politique*（2010 年－2011 年）について——その憲法問題点を中心に」，『福岡大学法学論叢』第 56 巻 4 号．
- 津田由美子．（1991）「ベルギーにおけるエスニシティ紛争の展開——1970 年代を中心に」，犬童一男・山口定・馬場康雄・高橋進（編），『戦後デモクラシーの変容』，岩波書店．
- ．（2004）「フラムス・ブロックとベルギー政党政治——1990 年代を中心に」，『姫路法学』第 39・40 合併号．
- ．（2010）「ベルギー」，馬場康雄・平島健司（編）『ヨーロッパ政治ハンドブック』第 2 版，東京大学出版会．
- ．（2011）「ベルギー——コンセンサス・デモクラシーの成立と変容」，津田由美子・吉武信彦（編著），『北欧・南欧・ベネルクス』，ミネルヴァ書房．
- 日野愛郎．（2001）「ベルギーにおける政党システム編成——欧州世論調査（Euro-Barometer）の分析を中心に」，『早稲田政治公法研究』第 66 号．
- 平島健司・飯田芳弘．（2010）『ヨーロッパ政治史』改定新版，放送大学教育振興会．
- 藤原帰一．（2007）『国際政治』，放送大学教育振興会．
- E・J・ホブズボーム．（浜林正夫・嶋田耕也・庄司信訳）（2001）『ナショナリズムの歴史と現在』，大月書店．
- 松尾秀哉．（2015）『連邦国家ベルギー——繰り返される分裂危機』，吉田書店．
- 三竹直哉．（1995）「連邦制ベルギーの国家とアイデンティティ」，『国際政治』第 110 号．
- ．（1998）「連邦制下の民族対立——ベルギーの言語集団間対立」，宮島喬（編），『現代ヨーロッパ社会論——統合のなかの変容と葛藤』，人文書院．
- 村松恵二．（1998）「オーストリアの新右翼——「合意民主主義」の危機とオー

- ストリア自由党の躍進」, 山口定・高橋進 (編), 『ヨーロッパ新右翼』, 朝日新聞社.
- 山崎幹根, (2014) 「「独立運動」の視点から考える地域民主主義の刷新——スコットランドからの示唆」, 『生活経済政策』 第 215 号.
- 吉田徹, (2011) 『ポピュリズムを考える——民主主義への再入門』, NHK 出版.
- 渡邊啓貴 (編), (2008) 『ヨーロッパ国際関係史——繁栄と凋落, そして再生』 新版, 有斐閣.

※備考

本稿は, 2016 年 7 月 12 日実施の立教大学大学院法学研究科「法学政治学総合演習」における筆者の研究報告を文章化して研究ノートの形式に改め, 同年 9 月 15 日に責任者へ原稿を提出して, 本誌へ投稿したものである.